



Title	ポストコロニアル・フォーメーションズ(4) 序言
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2009, 2008
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77344
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

序　　言

この言語文化共同研究プロジェクト報告書は、過去3年間刊行してきた同じタイトルの報告書の続篇にあたり、シリーズとしては4冊目になる。昨年度までと同様、その基盤は、大阪大学大学院言語文化研究科の教員と院生をおもなメンバーとする研究会「ポストコロニアル・フォーメーションズ」（略して PCF）にある。

ところでこの研究会には、制度上プロジェクトの正規メンバーには加わることのできない言語文化研究科出身者も何人か参加し、この会を充実させるのに大きく貢献している。ほぼ月に1回のペースで、ポストコロニアル研究やカルチュラル・スタディーズの理論をはじめとするさまざまな文献にあたりながら、近現代世界における文化形成のありようにについてあれこれと議論しあう場になっている。ちなみに、この「フォーメーションズ」という言葉には、文化に対する私たちの視座そのものを新たに形成し直すという意味、さらにいうなら、そこで得られた知見を未来の文化形成に向けて投射するという企図も含まれている。

ただし、PCF の各メンバーがそれぞれ異なる関心の焦点をもっていることはいうまでもない。そのような関心の多様性は、この報告書で扱われる題材にも反映されている。木村はトリニダードからイギリスに移住したノーベル賞作家のナイポール、村上はガーナ出身の英語 / ドイツ語作家のダルコー、そして依岡は、アメリカに移り住んで英語で書いている中国人作家イーユン・リーをそれぞれとりあげ、それぞれに異なる「移民性」について論じている。小杉はニュージーランドの先住民マオリと南太平洋出身者による演劇活動を取り上げ、伊勢は「人種」や「国家」などの信念体系の自明性について批判的な考察を開いている。

これらすべての論文のどこかに「ポストコロニアル・フォーメーションズ」研究会の積み重ねが活かされていることは間違いないだろうが、この報告書の読者にも、そのさまざまな議論のあいだに多様な「分節=接合」（articulation）の状況を読み取っていただけたら幸いである。